

テーマ：『 学校にいのちの森を 』～ぼくもわたしもエコレンジャー～

横浜市立 山下みどり台小学校

Tel. 045-937-0947

担当者： 校長 吉村秋徳



■実践内容：

緑豊かな八潮の「まちの学校」として、学校内の緑化活動「いのちの森」づくりは、宮脇昭先生（横浜国大名誉教授）の講演を聴くところから始まった。その後、先生のご指導や毎日新聞社、日産科学振興財団のご支援をいただきながら、植樹に向けた活動が始まった。

土づくり、植樹の場所づくりには全校児童はもちろん、その保護者、そして地域の方々にも参加して頂き進めてきた。特に地域の方々には、物的にも精神的にも大きな力となっており、ダンプカー、ユンボ、トラクターまで導入された本格的な作業が実現した。

2月18日（月）には、全校児童の手で952本の木が植樹された。宮脇先生ご指導のもと、低木・高木・亜高木などがバランスよく植樹されたり、保温や肥料化など様々な目的をもつ敷藁の仕組みを知ったり、自然の巧みさを感じながらの活動になった。

■実践成果：

こうした植樹の活動を通して、一本一本の木々や草花、水、生物が相互に関係しながら「いのち」の営みを続けている場としてのビオトープにも、子どもたちが改めて目を向けてきた。さまざまな「いのち」の不思議さ、巧みさに気づき、実感的にそれらを大切にしようとする意識をもつことが、本当の意味での「エコ」につながるものと考え、各クラスの学習を発展させてきている。

5年生のクラスでは、ビオトープに暮らすメダカに視点をあて、メダカを通して自然の仕組みを追究しつつある。また、4年生では理科の栽培学習で「みどりのカーテン」を意識した学習を展開しつつ、「自分ができること」をキーワードに節電やリサイクルの活動に取り組んでいる。

植樹した木々にはあまり変化が見られず、直接的な成果はまだ見えていないが、目にすることが当たり前環境にあることから、こうした二次的な意識の中に自然や「エコ」に対する意識を根付かせる仕掛けを工夫していかなければならないだろう。しかし、完成以来、あるのが当たり前状態で、そこに向かう意識の低かったビオトープに再び子どもたちの意識が向きつつあることは、成果の一つであると考えられる。

■実践ポイント：

「自然から学ぶ…」ということは「子どもたちを放っておけば、勝手に学ぶ（しぜんじに覚える）」わけではない。子どもたちに木を植えさせるだけでは、環境学習にも「エコ」学習にもならない。そこに教師の意図的な投げかけが必要であり、視点のあて方が学びの成立を左右する。

今回で言えばただ木を植えるのではなく、その木の生長した姿を教えながら、太陽の位置、他の木の植生などとの関わりを意識させることが大切であった。そこに意識が向いた子どもは、ビオトープの仕組みにもすぐに興味をもち、そこに住む動植物を今までと違った見方でとらえることができるようになる。ただ、ここでもビオトープに目を向けるきっかけとなる教師の働きかけがポイントであった。